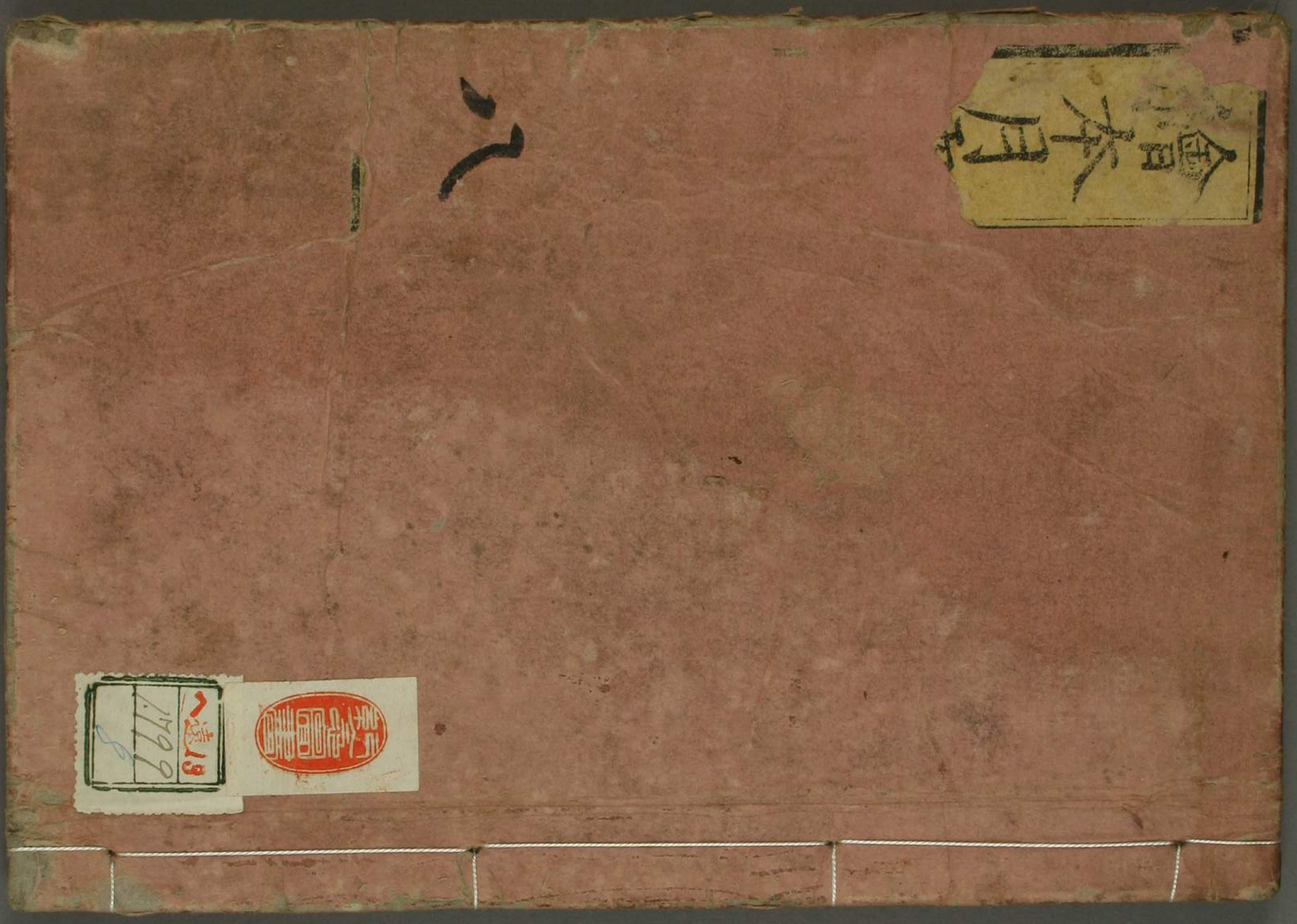
Centimetres
KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



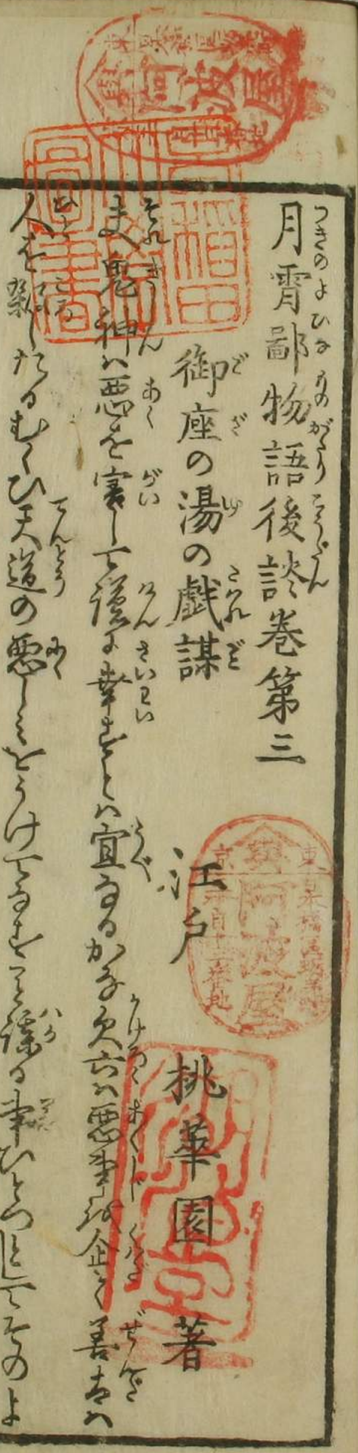
へ13
門
編
巻
1799

春風亭柳枝
三遊亭圓遊

月宵鄙物語後談巻第三

御座の湯の戯謀

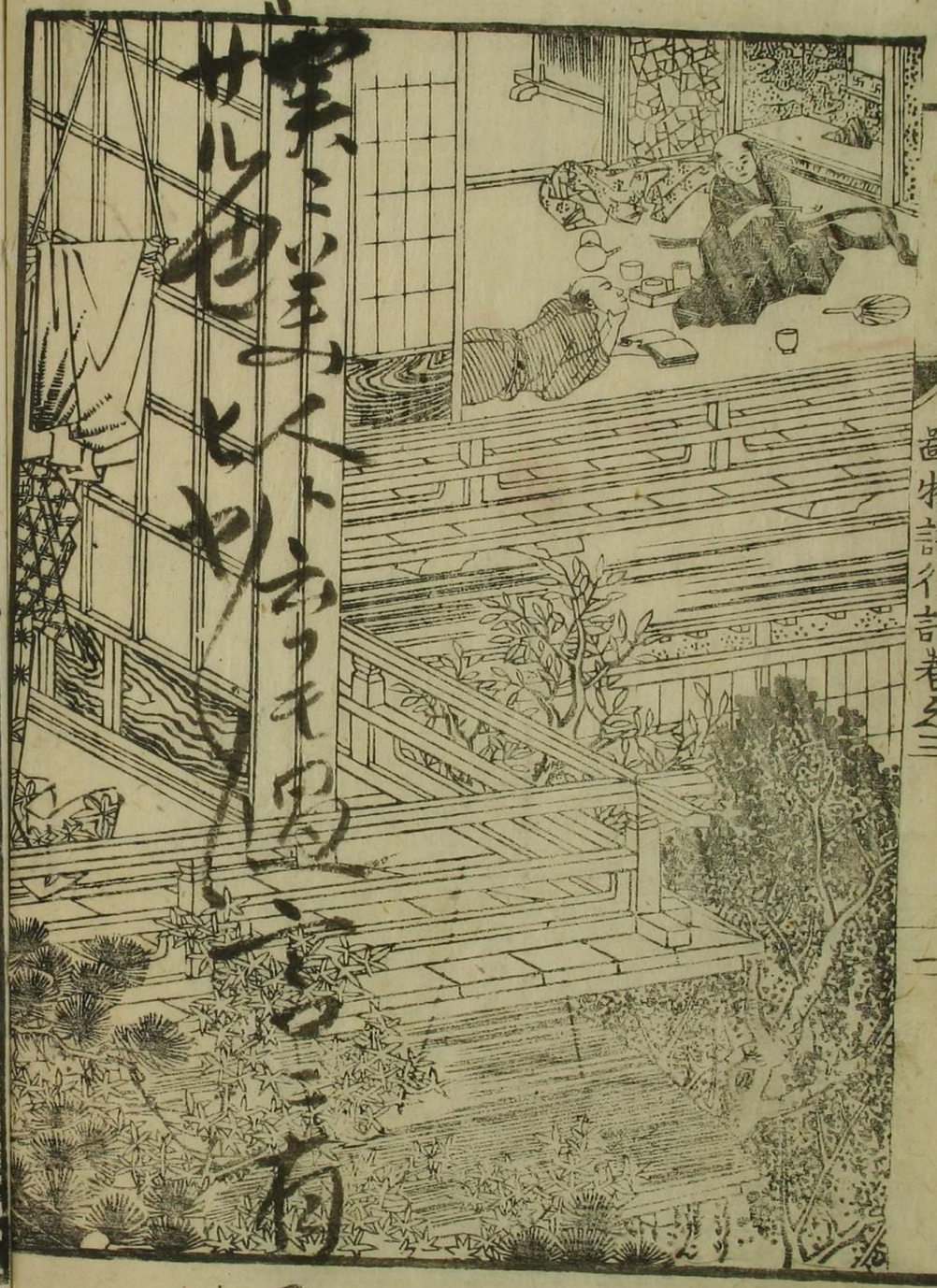
江戸
挑華園著



まゝ鬼神に悪を害して後よ善きしかの金を善きへ人を救ふるむくひ天道の悪くみとうけてるとて傷る事ひとつとしてそのよろこび事叶得ざるも実やこゝろ邪なべきう欠たる出郷の病よりふたる事なるを鬼を法師ゝたぶかゝん善きを地の罪ゝたゞむる事に奉くしの家ゝ寄るべしとふ仮屋の長者ゝ為ゝ郎に病進くゝ小地方ゝ名ぶ地に化物ゝ怪異ゝ出来しゝた岩の角ゝ手ゝ足ゝ傷ゝ痛ゝ打身ゝ腫れ上ゝ尤の呈ゝ初めまふたこびゝ大変なる毒の外科自由ゝ稀ゝ有ゝ懐ゝ遠ゝ遠くゝ入草ゝの湯ゝ水ゝ尝ゝ薬用ゝ加へゝ効能の義ゝ金時ゝ痛

を立てる事もやあるとて小侍をとのゝふぐるひ借人を人を遣て
和湯熱きまゝらゝ者の和小宿り紙のうへにてうゝ湯沸せり和
しの秋の始めつかふ砂りの器を遣人を備ゝ方ゝうゝ湯あるを蜜
さしも小廣き屋補ゝふ充満てあるひい菜逆花蹴鞠待人弄人徘徊師
後ゝ多ぐ紙を丸ませて端の上に俗うあゝ中ふも逆来不思儀とうゝい
十歳ばかりの藤の地獄が答まで女のあゝ壺て助けよや人ゝ叔ひてうぐかる
ぐゝと松山人や水樵が行ぎてふる斗り苦屋ひぐ上て遊ようれども
人ぐ臣形節若水小孫芙の火氣交りてハあゝとわきて烟の出る斗り
うゝぐ忘臣紙牛ありとゝ人ぐ又うゝ物ゝうゝ紙なよそれハ妻高
ハ中ゝれねども烟科の侍屋の長者が鑿ゝの世ふあしとゝう邪見臣て
仏の使ふ紙里ふゝ 蝋ちしうる 殺あふうて沸る山の火樵車ふゝれ

て生形ゝ五間地獄の苦みとうゝるあうとゝうをま婦を性ようもひゝと
ま紙白小法紙ぐ性ものうるたゝ花なあゝぐもいうゝ女ふも人ゝゝい
花ものひ仏ぐあうりゝや母力月の祝安のむゝひを月の表ふゝせなゝ分る
仏罰ゝうゝやゝうりゝ臣ゝそま婦を月ゝ月紙男会せゝ海鬼つ分る斗り
うう子ふゝんふまつと思案しは臣やその手たゝ人母力月の小母ふゝう
ぐゝもその人を地獄鬼等の借衆て形ゝゝの苦患ゝまゝひぐ
母の退縮ふもあゝぐて牛ゝうとんまれひめゝぐしてゝや二回ゝぐの湯
あゝふ豆の痛ゝもゝちゝゝうりゝれぐゝ家ゝ婦ゝんゝゝて後宅蘇
ゝゝるゝ小侍い血のとゝぐゝうふゝ小藤ふゝぐゝれぬまい今特ゝゝ
正まりて療利紙かゝ汚あゝゝ後ゝ臣ゝゝ人を付ゝて人ハ侍屋へ
ゝ塗りる赤ゝふ小草法ゝゝ八かゝ母の温泉宿母ゆげゝ二ツ宛て



小サン
弓太郎

かとゑ入てそれより湯をまぜ能くかきまぜて之を一まき二つづゝと甚粉を合て間を隔てさせ熱湯と二杯の湯宛にまぜて一つ宛の外湯といふをまうけ是に頼病悪瘡の者を入て浴しの湯に揉らせりこふ何ぞ姥が娃の夕霧は剛作を嬉しひ寂莫の暮ちにてよき者が悪ん明しに嫁長せる事殊にろしくおもひかゝるめ、小付添まバ行しん我故も共ぐ小類氣を含る事もねおつ為ぞいくはも迎る願ませやともひとれども道しころより奇なる病の出せかりて一ばらく煩しいつれ食ね鼠のおなく集り下身のめぐりにかすびなれまふるい合せ音立りほ迄てられがるめに進上して柳事更に耳に入ずでまる出族和まぶし小鼠の毛しかうして肢おがり肉らんれてみるは不断は鼠の如き毛紙迄でると絶せず我るは鼠床の廻りに多く集りて髪の毛を喰切ならし又へ

手足の爪をもむ事ありけれバ始めの程は悪れ鼠あつてかはわずてもちる事とおもひ閨をれるずと閨あうぞてほりれどもいづくもおく来るりては髪を喰切る也へて是はたゞ事あらじとあるの修験山伏法師等にかうおいせ又は行術児子どにれども更にしるしその證みへずぞありけれ樟鼠魂魄といふ鼠は陰のけぶいのは二てその怪異奇妙なる御あり悪気を盛に得て人を含つく事まさ婦人をなやませる事世にそのなれしおもかへし唐土にも嫁婦まづれて夜毎子女の志でむしろを喰ひ陰戸に入て女の肉をらし血を吸ひなくその女を殺せしこと東湖奇談といふもあり不出すり今夕霧が鼠にちはられてあるやまさる事も元此女の性質淫奔にてその志しもはかしぶ靴と粒をせしぬ姥のうろたへに頭が出までとこふ嗚七し剛作をもあるうちあきかよう

たかくひ悪行を始めて善ちゝ孫別れ
悔の返ゝ始りて女の動めをいとゝ事ゝ
うり給へ仏菩薩も山へ捨てすり給の悪行
の報病とりけて畜類の為ゝ毒虫さゝ事とハうりけるらの病
者紙始めとして諸〳〵の悪瘡ある病人どもかの無湯に入まりて湯
浴しかうりるがいとゝ夜雪の紙月まも撫〳〵としてゆげとの烟わのく
ゝとあるり紙小袖門ゝ出〳〵袖めあるが一段にてれ〳〵ぞ〳〵常
にて法衣のまゝ湯げゝふ入りかゝるの掉を掬など打うけて湯ふあるあ
うゝ大の男二人法とうまりてゝふ入れるを物かゝはをかへるふ
なかたゞ鬼のおりてのめくひとうハ月もにもひとつゝふうりていたゞ白ゝ
ちゝ紙月口と付うる鼻も見法師まゝ〳〵ゝ〳〵ありて疾出ゝや

とおりてゝも鬼の面ふ似る者ゝ口の湯げゝ紙ふ面と横ふ面ふれゝ
見ハあゞる半紙得どうるゝとゝうゝなゞゝんとゝもんゝも被白ゝるゝ
ゝ法師ゝ紙ゝひろげてあまバゝかゝも出ゝとゝうゝ見て色やせん
角やせ色とわゞゝふを二人の者ゞも決者ふ仙ゞ侍ちかくゝうけて
いゝ毋ゝ出ふ人ゝゝまゝて女も多ゝる中ふ法元の母ゝる美月容ゝ見
と衣抱寝ゝかゝ人ハたゝ法命ゝゝも更ふ厭ハ悪ゝとふあゞ
とて走りの白紙ゝとゝ掬ゝふ出て法師ゝ又大ゝとゝうゝ城等ハ抱寝
ゝる紙ど連ゝおりゞ者まふあゝねべぜめゝの半ふ玉の母ゝ丸ゞ
ゝりゝも紙ゝまゝゝゝとて松枝の皮の母ゝゝる黒く紙ゝゝゝ汁
の出ゝる白紙ゝゝのゝうゝに入ゝく湯の中ふ就ゝかゝ極ゝ人母ゝゝ
ゝゝどゝゝバゝゝて白ゝまゝ咽ゝゝ紙ゝ報ゝゝゝゝゝゝふ人ゝふ

もさがひたまへといふなぞ小仙今ハ思へ妻ハあらずぞ仏ならバ兎角に
よらじかるほどく又他に聞えても粗忽かくべけれバ兎にも角にもたゞかりて
後のたよりやと申し撤笑ついに妻ハ先ハ妻へ申し妻がめと交に浴せ
る事なしとりハまかせる者の病を看病せんとて付添来りつまじくも夫
ハさや病気で家に帰り妾ハまたつづきの宿に住て今へ久しく止まり
はるあり此後のつまじくいんへ今こそすく日数送りつつが遠の幾かゝぎる
こころじの経たじ久絶し来りえ妻も孕も妻えじるれば兎
にも角にもげん今に随ひ合へと申れども実に湯げる様し参らせ
まバ薬師如来の御利益の程も恐れあまりか今に及びて人知らぬ連
たまひてんの傍に楽しみ居る妻にも楽しみとさせるは彼ひく侍る
おもひのこすものなしとはりさせ給へりと定し母ふゆ迄二人の身

どりし実やとて机押ぬぐひ老しおどして湯衣のまゝにて女人を伴ひつゝ兎
此所の案内ハ知りたり小仙ハ人より先に立て杖むくのこぶる死所に入り
あやうきこそ人のみかりにハ来ぬ所なれバいさゝせ給へとて足ぞかりに急ぎ
ゆく二人の形人どもハ案内もわからぬにつけてこぶしを道すれバ木の根岩角
に妻をさはりあちらこちらと立ちひゆく所ぞ一つの細き谷川の辺りへ
出る二年後しなる丸木の橋をわたりつ猶小仙が跡を追ゆくと三四
丁ばかりとおぼしき比小仙ハ忽ちその茂る木の根の雨なら之落る
めとに大きなる土穢流せし洞穴のかまき所に身を隠しのびゐてぞと出て
つ丸木橋の手ごろなる縄一本にてまづし落して跡をも見ずに湯かと
が家に立帰りあかし此より此宿の主に語り忍びて夜をあかし翌日人
四五人をやとい一緒に伴屋が跡を送り見て戻りぬ後に此形人と見えしる

いろる者ぞと尋ぬるに小伝次の屋の女房六ツ〻顔を絵の具にていろどり
小仙が湯場に来り紙帳をわざと濡人の美似にて代湯げるに待うけ日
比のあり ひとそそうさんとて食の味まに物をあるくそれをこれがか
うどに成て小仙が戒名をとて悪ざことは後までせんと知れわろう
実に悪きことも悪むべきの甚しかれと云つゝ恩紙書るこまんの妻を横
恋慕をいろいろのこまかしかに成れ過の紙るひとをせ〻外の果美得ぶ
もの所より通るゝ紙枕又こゝに小善をが妻と形くるゝ夕涼いふもして
男小雛れを毋と思案をしつきゝも悪病のこめふる母さんて身を
いろんとも寄る事ふく年沸の湯より行もるろハ苦痛も暫く安うり
ふんゝる家を攻るこれハ元のゝ牧夜の嵐秋毋くふ来りて夜外を
りゝ苦しむる事いきんうくふく嵐四五疋来りて顔のいろうよ
り額のあうり紙ちゝかよ嬢とこて貝紙光一つる小二疋の嵐右と尤より
肩れうよ伝ちり一個のと紙むぎと嘗ひふれあと麦ちて絶入り
かくまる事たびくはて後よ面へたれあゝ新ハ嵐のかくちよ陰と
ちて貴和をうれるやはふれ善ちハ見るもうるくありひ家る
とそハ色もちゝびゝうかこと細しに悪事の企ての〻ぞめゝ見る

長者原の忘録

それい猪くまこ亜こ小又鉄浅田和寿敬よハ信法ある海住の志郎
持鼻ゝ武男のぬえ毋小ろく猛金の器も絶の人くまこえる事
を賞美有くゝ先遣て婚姻の義中入ゝて百ゝ縣の小寺郎男ゝ提言
の儀式及はうくゝ元のよとゝ中断ら毋るゝ諸遠々ゝ紙帳しくく
諸事の用向ゝ毋ゝ海住ゝ家の不縁ゝ月一統へけ合ゝる小実〇三尿

小右郎
右
右郎

蓑原より狩場の市利相助かるゝ佐屋の長者園右
衛門は農民ふせも豪富にてそのころ氏家より稼ぎるものゝ万端の
用事いろいろなる中付べきのは望月家よりも奥より相談あり万ふよりこしらへ
縣の小ち郎とゝ佐屋の長者がゝ婚礼の諸色まかるひの用向
相入ゐるふその使者とてをぢ七郎家其外奥〳〵小ち郎が外のまゝ
美〳〵義を結ひて長者がゝ〳〵入来り孫ごろよりの人の取入を紙迄万端
まかなひの義はやふかなべぎ貢尾和歌ひ中入れば長者ゝ小ち郎
大ひよ妓び家の面目身の冥加人ゝ多くひ中ま武の垂ち明伝付〳〵
の時先に異りなりいかりとて後捕を一万ぬりとて小ち郎と丁寧ふ敬
まひり上ゐ物目〳〵会の性西出紙より〳〵種〳〵の道ち諸式まで万端
物甲斐伝授上世ち世ふの所ち更婚礼の初夜紙や付ゐる中ま只一つ

半ちゝるハ只よ紙一面の〳〵あり是ハ此ごろのおはて笑人ゝ佐のれあ〳〵
ハ中まおよびぢ妓の者の娘なりゝも婚姻の能ハ半紙紙ゝ名筆ゝ
芸の系図の〳〵ゝ伝経言筆の密〳〵と其家〳〵姫すゝ〳〵りゝ〳〵ゝ
笑人ゝ家の経ちの式ゝハ古筆を櫃ま納ゝて持ゝとつゞ半ゝ〳〵ゝ物
菊阪の家ハいゝ成半ゝはてゝる古筆〳〵ゝ〳〵ゝ半紙思ひ
わづ〳〵ひ〳〵ゝ多ひ小ち郎小命ぜ〳〵れ〳〵半紙佐屋の長者と為ると佐今ふ
なゝびゝ〳〵ゝ家ハ農ま〳〵ゝ岳富ぬきばりゝ珍宝もまきハあ〳〵ゝ〳〵ゝ
よ〳〵ゝ和漢ゝ和歌ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ家ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
危ゝ〳〵ゝの筆ハ〳〵ゝ得ゝ半ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
ひ〳〵ゝ半ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ
よびゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

育てる者を今日こゝに入れしは孫のちよ姫娘なれども半は孫なる
ぞかくおさなきとをよかしげて父はわうんぬれば今年二十余年の昔和
と侍くゝ小さ能い武士とありまくゝ仙ぐし家の妻とあるべき半は義ふぐ
ふ五さ物ある半もあるべくゝ武士の半は付て松寿殿を始めとゝ来せ
ふ当ふ明ふもんを嫌さある半紙氣の毒なるいうもしてきるべき女房
一面を待ゝ来ゝせ来ゝ嫌さるがあるゝ紙長者きんを
んまあるのゆうへゝ行我妻の小仙文すると今は叔母を仕りて家を連来
ひゝるに紙銭ようけゝる猶こそかをぶ母の紙母の世より持つくゝる
りの妻女の半りあれゝとを持ゝる紙文のそんを志ふ紙後の奥する
れの山家を蒙むれども得ぞとかをりたもひゝぶとの布ようひめ亜なま
ひんとゝら長体蒙めくゝられをりや先備糸ゝ小仙ふ志ゝ

のお絡ひゝれがそれこそ幸ひのゝ見びたゝ母ふ仕ゝる宝ゝり共ゝぶ
源くひめ亜のゝふてハ志ふ宝紙も堀むゝふ同じ紙半ゝり人のゝふも重寶
ゝ紙ゝまゝゝ母の寶の仕れ用をたゝぬるゝ紙善ゝも徳をも世ふ布絡を
のつゝあいなゝべゝりゝれば長ゝん用遊たゝん半ゝもゝふべゝゝ糸ゝゝ
ゝて撥蒙めゝゝふ庵穏の庶ふ二重の箱の中へ紙ゝ志ゝ志ゝてありゝて
長出ゝて長紙ふ志郎ふで見せゝりゝるふ志郎ハ長を立あげて撓を
うち返ゝゝて打絡め表をゝめつ裏を返ゝて中紙ゝ見ゝりゝて
箱の上ふ立てハ又袋とゝゝがゝて見表と見ゝくきつゝと伏座のゝ紙絡
めてヤ中ゝいゝ撓ハゝれゝゝゝ母ふゝりてハ芝ある一和ゝりさゝ少てハ荷
ゝる中緒いう敬関縁のありてゝ長者ゝゝゝふ侍ゝりひふやゝとゝゝぶゝ
ゝげふゝでヤたゝれゝゝゝ長者ゝゝゝふ志郎の長ゝゝゝ母ゝふさんゝゝてゝ

ひ縫ふ付けて外の殊の外なる長しこれ物語のい中よりて仕る我又立世の御り
ふと用命あり〻て学ぶ玉清墓山のわたりと夕間暮ふ通りいるに〻紅葉
寂莫村の花紫舎もあれどと禁るる道をすげてかこふ清るうさその里
を離れいる並木を四五町ゆ行ふ松のあぶられ枝ふ焼のうげわれ
えてそこふ仏のさこりいげつ〻泣森の赤る紙衣ふ焼ていう紙のようや
立ちて祝てうかぶひ伏るるうちわうけるる情打どりの赤ぶるげる奴
原と四人集まり芝生のうふ赤うを赤く年のころ五十歳だかりるる婆と
中ようまとひかよかりよと罵りあひてその夏代のかくふ山女を焼き
もあぶるうむどひ赤ろ〻紙皆うねあるまいう紙人の婆をうるうきて
かるる長恋の猿蓑をやなせるいそ助け敷くぶやとあるひ懐よたくうよ
黄金性て如何買取家ふ法を求てぶとうう紙かるの者ふく文ふ名と

何と中女をいう紙人とのふぞやと尋ひるれども泣ふ泣ばりて拭ぶふ
いそひびを色るぶあて八問尋るふ機姫よれ牛ふ〻ゆ〻言ゆ妻
八織る夏の新松のとうるる和の者よて君をバふ仙とひて文もり
女もあり母の衣ふ紙ぶ文をバ紙鬼どのとて里の人〻等の呼れ
とうよさあ〻バひさ〻ふ母ふ紙者のるよてあしとて牧ひまと直ふ北
第るる猿の猪扶い妻の牧ふむ〻弱るど紙かゆ深たる結ふ宮上紅
の顔顔深の芋寺うわ〻ひとりありの世さかと形るふ人並〻育
がるふもあ〻ぶひいうはて秋里を尋祢家ゆう早う云ゆ〻ぶ友
とて父るる人のるぶうそのを尋を尋紙ゆ〻女ゲ猪よりけうる読
を赤色とて素もれぶも夏よさぶかよそれとうの和をそぶれば家
〻家ようて先てふ貴ひ赤ゆをりて物語りあど紙〻

のてびい尋ねまゐりてわゝ生きまゐらせ有がゝとこゝろをあつ
二十余年の月日経ぬれり去る所なのんぢうえ世をしてを桑田
世をもぐれるまゐりとて文も我国の仮の世つ間なる去るぬかゝひゝて
只今まゝへ僕と夫婦の契をゝ結ぶ行ゝ則此猿のとゝ死の守りは
て妻の小仏が守りあり共の貴の中家を去るべき物の妻り
つる半紙りゝひいひる紙妻もゝ小痛ゝくあひ弟ゝ世命角
是ゝも苦ゝかるほゝゝ弟ゝ世ひゝ拙ゝ知ゝ浅ゝ深め
て猪ゝゝ程ゝ物ゝもえいとゝ行ゝ有ゝ岩ゝ中ゝ行ゝ山ゝ猿
八昔伊豫の国ゝ夫婦の猿物師ありて夫を雄ゝ妻と雌ゝ麻ゝ
とり朝ゝ峯ゝ登りて見ゝ行ゝ家ゝ渓ゝ谷ゝ水ゝ中ゝ汚ゝ穢ゝ
夫婦清ゝ浄ゝて寅の一天ゝ記ゝ出ゝ洞ゝ山ゝの猿ゝ子ゝ三ゝ十ゝ六ゝ面

の猿をうちかゝじけゝも実人へなるゝ甚うち三面ハ蘇我の入鹿と
いゝ面ゝへゝさゝるゝをゝ一面ゝ紙ゝ著ゝ生ゝの山ゝの麓ゝ有ゝる松ゝの樹ゝのゝもゝふゝ地
めてゝしゝかゝる罪ゝよゝりゝて捕ゝへゝ死ゝ罪ゝよゝ彩ゝふゝ
人のゝ夫婦伊豫の国を通ゝ武蔵国の市ゝ場ゝ小川の里ゝ
を過ゝまゝ妻ゝびあゝ国の司小笠原ゝれゝども人の後言ゝ依ゝて流
浪ゝ夫婦ゝ命ゝ捨ゝて別ゝ去ゝりゝとゝ思ゝ子ゝ共ゝ思ゝて田舎の猿ゝ
ゝり古ゝ伊豫の国ゝへゝ帰ゝりゝて帰ゝる猿ゝを見ゝふゝ入ゝれゝば不思議ゝ哀
命ゝて元の婦ゝと契ゝを結ゝび雄ゝ夫ゝハ九十二歳ゝを強ゝて世ゝ去ゝ婦ゝ
九十四歳ゝて死ゝゝ行ゝかゝる者の作ゝるゝ猿ゝ見ゝれゝば甚ゝ哀ゝ
赫ゝゝとゝて是ゝ紙ゝ保ゝつ者ハ命ゝ長ゝ運ゝを拓ゝき是ゝ失ゝ者ハ命ゝ短ゝ
次ゝ第ゝ衰ゝゝとゝひゝ行ゝその後ゝ我ゝ先ゝ祖ゝ

小右郎
そもそも伏屋の長者が家
境の徳より親より五倫
手右郎

竹井寫
右仙

雄渡よりすゝひ代くれのちの浅瀬を過て千鳥ヶ淵を経
てうつきんば山続ハのゝ伊勢の国なる松山より出る法ふりて松山の鏡
とゝのとへ嶋瀬の鏡なるゝ松ふらゝ山ちの嶋を始て紙鏡
鏡すなる神のきれへ能勢の金ふゝ亀山唐の玉宗白玉帝士鏡
恋ゝなる物美妃のうゝびきぬのきれて我郎子六畳敷ヶ國寺の青海切
いもやあり志ゝるゝれへ舟の妻と宮あぬる和の女山仙ゝの人紙娘よ
うすゝ和あゝべうゝびり難ゝくなりひゝ九の根の下小一つの恋ゝ思疾
あり千我も同じ山ゝ人ゝの人ゝ指小指中指よりも長ゝ
といきれゝ弓ゝ彦郎八人小ゝ長郎市千ゝ八ゝそれ
小ゝの疑ゝくなひゝ志ゝといゝ志ゝる後を見ゝ千ゝ物より後ゝ指
ゝる運の身を包ゝ能ゝ誉の切ゝ五ゝ千ゝの後の鏡ゝ隆ゝ会ゝ小

七会といひ指ゝとゝひゝとゝも遠ゝ和ゝ小ゝ人ゝ不思議ゝ今日ゝ牛ゝ
聞ゝ遠ゝ志ゝ牛の奇遇をゝ牛ゝ妻ゝ小ゝ紙ゝ二十余ゝ
ゝ花ゝ別ゝ文小ゝ郎ゝ敬ゝ遠ゝ打ゝ千ゝ打ゝ小ゝ人ゝ
ゝ小ゝ思ゝ千ゝ三人ゝ小ゝ都ゝ会ゝ小ゝ実ゝ牛ゝ小ゝ思ゝ千ゝ
ゝ牛ゝ遠ゝ程ゝ牛ゝ牛ゝ野ゝ

本城原の敵牛

志ゝ小ゝ伏ゝ屋ゝ長者ゝ妻ゝ番ゝ
聞ゝ小ゝ親ゝ名ゝ生ゝ
牛ゝ働ゝ千ゝ嶋ゝ
ゝ志ゝ睦ゝ小ゝ金ゝ紙ゝ長ゝ
嫁ゝ親ゝ出ゝ千ゝ会ゝ千ゝ名ゝ牛ゝ数ゝ

見へ不思議の値偶を中上手くせられて松茸獻るも大きふ仕滅堅有
て教きの正寝美を綴りしとは小ち郎は加護有て徒並び着ち紀
羅紗と称れ長者の小仙も共くまの同通の紙ゆるられることを知れる
是よりしてひとつの大事とりくへ長者父の紙をむしひ父が紙舞の苦患
をそらこせ系くまるより外臣とおもへ逆ぐ小ち郎は父の
ふてれいと安き事取りたく敬の奴如有て天をかけり御有て
地をくぐるとも一朝は付んときびと紙先ぐ〳〵はひ食あるべ〳〵ち
ぐ系ふ徒堂を集めて逆紀あるうは悪紀をうけとりをを事
代るこの事用をを大切うり私の家ハ先〳〵次いて〳〵早く松茸
獻の婚姻の手紙をこの〳〵事成就よ志と会て其後付先小紀のみ紙の
あるべきとかるく紙束を拾めて其事のこでいるあるこ

世を去く紀糸も知〳〵ぼう紀世力自の母七果を世間よハさ多く、
よ評議まち〳〵あるところひあるこ紀を田園の紀者来て紀
ムヒ知るこ逆をもわちひこ宅牛の少屋紀屋の紀ト中
りこも一夜あるこせたびこ見ひこと新ふぞ〳〵安て事取りこ紀
なよ入〳〵こん安〳〵休息ビこて搖紀ゑど下寧よ獨へて臣ろが
紀〳〵こ今逆ト変ち〳〵求めハこれ出いるる事こ紀〳〵ねども逆つ
うハビこと〳〵同よ通〳〵こを知よ逆〳〵紀のこ中ちこふいる牧事ビと
向るこ死廻ふの紀紀者中るハ今雪ひこふ小ふ知がこう中ちこの
こと中ハ余の事ふてもひハひこ父ハ仲勢の思こる同ちこのかこハ
市切村といハ家の者こ中ひこん頼の事有こ法ふの紀図を巡ち
事〳〵せきの當主減ろ山ま私ろひハハるが広流こりこハ弟をこ

のぞきに洞のあるうふ階に紙張りてあの新ふ〜遠うる若間は硫
黄の氣ふつ〜とめえ立あがりたる中ふ癒衰えうる姥の腰と首とが
ふらりよちぐ〜と陽炎のうえ死虫のやう形う衰〜ヒトや助けあと
ゆ蒙毒をつきぬく〜やうふ見えぶ出るを結ひてかつ〜の根はすがり
つきふつと見紙のぞえうふ十結八例の若〜ヒてうぐえうう〜糸
の毋うちうる小紙さ〜知ら〜何毋〜四行りのをとれ〜ふこてうえ死粕あ
うる狐枝をさ〜知ら〜ふうふ枝の先は掛〜うえう見紙見ひはち
いうるう笈強うえ何毋〜書うと見るは南無善光寺如来拝祈ヒ
てうふ伝濃国恒科記蒙祭伝鉢の長着うち郎毋力自行年六十九
歳とあイノ則ち知ヒてひうと資布ちう物行まの中うう紐〜く
笈出て長者が恵〜恵うえ出て長者を見るはもぐ〜ろの

もう紙の独筆をうつて細ぐ〜と書うる人のちうるりのうも見え
ぎうふうふきぐうみおうるえ空のふらう暑〜て布はもうなるやうふぞ
見えはうるうち郎ハ一日うるうり滅をちう〜と流〜たあ〜ぶはよ〜
毋力自へ現世の業苦も打ちまはぶ〜て出ふ〜眼前ま浅るが出嶽
の地獄の釜ふ苦〜ふ紙うんけなまへはま〜ヒは奇怪の終うとうへも
ふひつ〜えるち火神車うて行りはるかみとそ〜めて人の焼ちもおりい釜
下れげきかはこ〜はるこを遥理うるる狐もう〜ふ紙ふ者が中はるふ我苦ふう
り〜て苦須ふうけうこへをちうまひうつ〜まるふ全むうひて直対
るふ笑う〜紙ち見紙伏屋のりへとぶけ系〜ちうう〜紙うけぶび
ひうりふ和文ふもや伝うこのけるやうとらへぶ〜着うちう〜らへい
我ほど安まかるう〜ぶ〜たやう〜和家ま胸あう和の牛ま入〜うう〜を

牛となりて畜生道に堕落し地獄の猛火に三年の辛苦を経て後ち
またもや人界に生をうけて世人にうとまれその身は三ッの仏閣に
機を得て五世の勧行にわたりて全く善男となりて生れかはり
かるがゆへに此般にいふところの今の旅屋の長者が親父曽平といふハ六道輪廻
道にして善根なく殺生を好みて慈悲無情の道理にいひて善光寺に
常燈を寄附するものゝ修業銀をかすてなんとかけたるむくひ当に
よりて因果縁なの末々までもつゞく当時の手代なる者はこの
積善根をつくし慈悲情の徳をいつくしみとりとも孫なる
わるゆゑにはてていさゝかのひかりもなりても残りなる殺て
無量億劫をふるともいかな苦悩をうくべしとの追福を
遂げし銭も人もかの罪障消し障を滅せんとするに善光寺の

よかの寄附せんと企る常燈のことはいはでも万燈をもつ
三万人の結縁をもつて餓鬼に施しも紙助けまべ地獄餓鬼畜生
の三悪の苦しみ逃のがれて仏道の結縁にもよりあがりて天上の果を
うくべきものなりと思ひ結りてなりとのそのものゝ中にあまり苦しみやと志
づく失ひなりとかくうゆゑ為すも小仙の身は水の如く冷たう
其の生成る汗を出でてさもおそろしげにわずらひつゝ途ようやくゆるの
ものあしざりけりかくて仏間に入りて香花を供えて
貴家指摘して経文を読誦し持仏の前に数珠を逃して
従ひてとるべくその夜はあけ頃にも悪しべや部屋に行てかの覚悟と
牛の頭をいだかせるに牛ハ牛に陀羅尼はして
別の子細もなくありけるが第七番目の小屋なる牝牛は此発を

徒行者

のくまいくぶかきをひとしく膝をうつて尾をふりて
目をうつ流をつくる船をかつぎ付あるものうかうえいるを
不思議といへもあまりひろ初めてそれを見るに牛紙をもつて
家をもとめてそれを見るに牛紙をもつて角ふ茂強をもつて善
くつう手くまつりでそせるをこれを稲くを上はの仕をくを
無の墨の角ふ牛ふひろくを善光寺をつとれを墨へもつうつう
志うんぶで善業の所感へその周遠をとへも絶よ現前の災で滅
無報の報因へその果をるうありとつへもかでるを孫くの不幸ふ
いくれりと怪せたるひて人へそのたのまとりまけの所の稼をばもを
いつの幸う芽紙生じるの秋う実とありてめとの草木と生ぬ
とへあくざるうひつまるとその種のこばをくてそ未来へつ

わどまでも因果報應の紀ざーひつ
おそるべきことへ式善悪邪正の一合ふーてまと見性成仏の機うつ
曾平紀文が悪報の種紙苔しつ
少紙を家を来へまでへ邪想をて消滅をつふきをを
まの眼力ふでへ見届ることをたさばれども神明仏懐の眼ふへつる
小見抜なくへばかれるつ那へ
絶るこれを至りてへ悪もおしへをつ紀をうおごをつあるへかを
むくひて通るも時節をく善へをを
へふ孫繁花の陽相をるへば返をつもを通をて
をう人傷をいをつ紀へ俗好邪横のはつををつ

月霄鄙物語後談巻第三終

波屋